

Vākyapadīya II 研究 (2)

本 田 義 央

さて、以上 VP II, kk.1-2 に見られる 〈vākya〉 定義をプンヤラージャは分類検討し終え、次にそれらそれぞれそれぞれの定義に従った場合の 〈vākya〉 の意味 (vākyārtha) を順次検討する。

〈翻訳〉

[Puṇ 1-2.5] 【vākyārtha は何か】

[Puṇ 1-2.5.0]

そして、文定義との関連 (prasaṅga) から、[文定義の場合と] 同様に、文意 (vākyārtha) と関係 (saṃbandha) に関する種々の見解を示すであろう。

[Puṇ 1-2.5.1]

【akhaṇḍapakṣa (①②③) →pratibhā】

その [〈vākya〉 定義諸説の] うち、不分割説 (akhaṇḍapakṣa) においては、[①②③と] 三種何れの定義に於ても、直観 (pratibhā) が文意 (vākyārtha) である。たとえば、[次のように] 教えるであろう。

『[VP 2.143] 諸々の意味の区別が理解される場合、[それら個々の語の意味とは] 全く別の直観 (pratibhā) が生じる。諸語 (pada) によって明らかにされるそれ [直観 (pratibhā)] を [文法家達は] 文の意味と呼ぶ。』¹⁾

[Puṅ 1-2.5.2]

【④ākhyātaśabda→<kriyā>】

[不分割説による三つの文定義①②③を除いた、分割説による] 残り五つの [文] 定義の中で、[それらの] 内から取り上げられる (madhyāt)

④『定動詞形が文である』(ākhyātaśabdo vākyam) というこの主張においては、<kriyā> が文意である。例えば、

『他の行為から異なる (kriyāntarād bhinnā)』(VP 2.414)²⁾

云々と述べるであろう。

また、次のように [いわれている]

(1)それから意味が生み出されるものである直観 (pratibhā)

(2)それに、実行 (anuṣṭhāna) が依存している

(3)それから [<kriyā> を限定するものである] 結果が生み出される

[以上の三つの] <kriyā> が、文の領域 (vākyagocara) [つまり文意] である。³⁾

[Puṅ 1-2.5.3]

【⑤⑥→saṃsarga】

⑥集合説 (saṃghātapakṣa) と⑤連続説 (kramapakṣa) においては繋がりが (saṃsarga) が文意 (vākyārtha) である。そしてそれは、

[VP 2.42] 関係 (saṃbandha) がある場合に、生じる別の付加的なもの (ādhikyam) を文意と呼ぶ。[そしてそれは] 複数の語 (pada) に依存する。云々によって示されるであろう。⁴⁾

[Puṇ 1-2.5.4]

【⑥の場合の別見解】

さらに、⑥集合説 (saṃghātapakṣa) においてのみ、『総ての差異に適したものを (sarvabhedānugūṇyam)』(VP 2.44) 云々によって、[VP II, k.42 とは]別の方法で (prakārantarena) として、〈abhihitānvaya〉説が、説明されている。その場合、『関係 (saṃbandha) は結果から推理される。それ [saṃbandha] には、形 (rūpa) が存在しない』(VP 2.46) というこのシュローカによって、諸語の、特殊にとどまっている (viśeṣaviśrānta) 意味が文意であると定義されている。

[Puṇ 1-2.5.5]

【⑦padam ādyam ⑧pṛthak sarvaṃ padam sākāṅkṣam】

しかし、⑦『最初の語 (padam ādyam)』⑧『期待を伴った別個の総ての語 (pṛthak sarvaṃ padam sākāṅkṣam)』というこの二つの主張においては、繋り (saṃsrṣṭa) という文意が、まずより始めに理解される (prakramyate)。

[VP 2.18] しかし、文意全体は、それら [諸構成語] の部分ごとに完結している。⁵⁾

さらに、

[VP 2.415] 後続する各々 [の語] が、先行する [語の] 意味によって、意味を本質とすると理解される。同様に、最初の意味であるもの (arthavastu) において、繋がり (saṃsarga) は理解される (prakrānta)。⁶⁾

[Puṇ 1-2.5.6]

【別見解 vākyārtha=prayojana】

『[ある人にとって、]〈pada〉の‘artha’は表示対象 (abhidheya) であり、文 (vākya) にとっての‘artha’は目的 (prayojana) である。[その人にとって、複数の〈vākya〉の間の関係はおこらない。』(VP 2.113ab)⁷⁾

というこ [の偈] によって、目的 (prayojana) が文意として示されている。

[解説] ここで文意 (vākyārtha) を目的 (prayojana) とする解釈が示されている。この見解は‘artha’の多義性に基いている。‘artha’には、「意味」「目的」という二義が有り、後者で‘vākyārtha’を解釈しているわけである。したがって、これまでの vākyārtha (「文意」とは、レヴェルのことになった見解であるということができよう。この vākyārtha を prayojana とする理解は、JS 2.1.46 に対してシャバラおよびクマーリラが示す解釈である。詳細については、この JS 2.1.46 のパルトリハリによる解釈である VPII k.4 の翻訳研究の際に述べることにする。

[Pun 1-2.5.6.2]

【prayojana】

それ (prayojana) は、ある者達の説においては、総ての [文] 定義に共通する。したがって、目的 (prayojana) という文意は、[①から⑧という] 文定義 [のうちのどれか一つ] に別個に割り当てられることはない。

[Pun 1-2.5.7]

【〈vākyārtha〉に関する総括】

以上のように、(1)直観 (pratibhā)、(2)繋がり (samsarga)、(3)繋がりの方によって [相互の] 期待をを満たされる特殊に定在する語の意味そのも

の (saṃsargaavaśān nirākāṅkṣo viśeṣāvasthitaḥ padārtha eva)、(4)繋がっているところの意味 (saṃśṛṣṭa evārthaḥ)、(5)行為 (kriyā)、(6)目的 (prayojana) というこれら六つの 〈vākyārtha〉 が、ここで提示されている。

[Puṇ 1-2.6]

【abhihitānvaya / anvitābhidhāna への配当】

【abhihitānvaya】(2)〈繋がり〉(saṃsarga) と(3)〈繋がりによって、特殊に定在する語意〉(viśeṣāvasthita=viśeṣeśv avasthita-) が文意 (vākyārtha) である場合に、abhihitānvaya 説がある。

【anvitābhidhāna】(4)繋がっているところの [意味] (saṃśṛṣṭa [evārthaḥ]) [が文意 (vākyārtha)] である場合、または (ca=vā) (5)行為 (kriyā) [が文意] である場合に、anvitābhidhāna 説がある。

[Puṇ 1-2.6.2]

【(1)pratibhā: anvitābhidhāna / abhihitānvaya とは無関係】

しかし、直観 (pratibhā) [が文意] である場合には、実に単一の本質を持つ理解 (pratipatti) がある。[単一の本質を持つ理解がある場合、anvaya は成り立たない。] したがって、その場合には、abhihitānvaya もしくは anvitābhidhāna についての議論 [の余地] は何もない。

[Puṇ 1-2.6.3]

【(6)prayojana: abhihitānvayapakṣa】

一方、[vākyārtha が] 目的 (prayojana) である [という] 場合に、[根底にあるのは] abhihitānvaya 説のみである。

[Puṇ 1-2.7]

【vidhi, niyoga, bhāvanā】

vidhi, niyoga 及び bhāvanā と呼ばれるものに関して、文意は説明されない。というのは、〈bhāvanā〉と〈kriyā〉が同義であることは、一般的に知られているから。ただ、その場合、語基の意味 (prakṛtyartha) と接辞の意味 (pratyayārtha) [のどちらであるかということ] に関して、文法家とミーマーンサー学者の間に議論がある。

さらに、〈bhāvanā〉は〈karman〉を必ずともなうが、〈kriyā〉は〈karman〉をともしないものもある、というように [〈bhāvanā〉と〈kriyā〉が] 区別されるとしても、〈sādhya〉であることは [両者に関して] 区別されないから、両者の間に、違いはない。⁸⁾ 語根 (dhātu) の意味である〈kriyā〉が〈sādhya〉という相を有するにほかならないのと同様、〈bhāvanā〉もまた [〈sādhya〉にほかならない]。従って、下位の違い (avāntarabhedā) によって、どうして、[〈bhāvanā〉と〈kriyā〉] 両者の間に違いが有り得ようか。[違いはない。]

一方、儀軌 (vidhi) と niyoga の両者は、〈vākya〉が、LIN, LOT, krtya [という各接辞] で終わる [ものを含む] 場合のみの意味である。したがって、[それらの接辞で終わるもの以外を含めた] 総て [の〈vākya〉] を対象とするのではないから、ここでは [それら vidhi と niyoga] に関心は向けられない。したがって、それらの説明はなされていない。

[解説] 文法家は、〈kriyā〉を動词语根の意味であるとする。一方、ミーマーンサーカは、文法家の〈kriyā〉に対応するものである〈bhāvanā〉を語根ではなく、人称語尾に割り当てる。詳細は、黒田 [1980-81] を参照せよ。

[Puṇ 1-2.8] 【仏教説】

[Puṇ 1-2.8.1]

【仏教説における文意】

仏教徒 (śākya) たちにとっての文意 (vākyārtha) は [次のようなもの

である]。文意 (vākyārtha) の構想 (vikalpa) によって植えつけられた (āhita) 各々の (tattat) 始まりのない (anādi) 潜在印象 (vāsanā) の目覚め (prabodha) から生じる形相 (ākāra) が文意 (vākyārtha) である。[その形相 (ākāra) は、絵にかかれるかのように (citrikṛtaiva)、複数の語意 (padārtha) によって、特定の概念知 (vikalpaviśeṣa) が描いている (ullikhyamāna) ところのものである。[そして特定の概念知がそれによって形相 (ākāra) を絵を描くかのように描いているところの] 語意 (padārtha) は、実際には順序をもたないが、あたかも順序をもつかの如くであり、外的なもの (bahīrūpatayā) 思い込まれる (adhyasta) ものである。[形相 (ākāra) もまた、語意 (padārtha) と同様] 外的なもの (bahīrūpatayā 'dhyavastah)、まさに部分をもたない (nirvibhāga)。以上のような形相 (ākāra) が、仏教徒達の考えでの文意 (vākyārtha) である。したがって (iti)、この見解は、直観 (pratibhā) と発想が同根であると考えられるべきである。

[Puṇ 1-2.8.2]

【仏教説における文】

文 (vākya) もまた、文の概念知 (vikalpa) によって植え付けられたおのおの始まりをもたない潜在印象 (vāsanā) の目覚め (prabodha) から生じる特定の形相 (ākāraviśeṣa) にほかならない。[その特定の形相は]、[実際には] 順序をもたない (akrama) が、あたかも順序を持つが如く (kramavad) の諸 <pada> によって、特定の概念知 (viśiṣṭavikalpa) が、絵を描がごとくに、描きつつあるものであり、外的なもの (bahīrūpatayā) 思い込まれる (adhyasta) ものである。したがって、[この仏教徒達の見解は] おおむね知における統合 (buddhyanusamṛti) が [文 (vākya) であるとする説] とまさに発想の根源を同じくする (sodara)。したがって彼ら (文教徒達の) 考えに従うところの文意 (vākyārtha) と文 (vākya) の両者は、ここ [つまり VP II Vākyakāṇḍa]

に含まれていない、と知られるべきではない。[まさに我々が述べるところに含まれているのである。]

[解説] 部分テキストの問題があると思われる。pada と ākāraviśeṣa (=vākya) の双方が「外界のものとして構想される (bahīrūpatayādhyasyamāna)」べきであり、現テキストのままでは、同一の ākāraviśeṣa に、その述べんとする内容をほぼ同じくする bahīrūpatayādhyasyamānaḥ および bahīrūpatayādhyastah という二つの限定語がかかることになる。これは、無意味である。したがって、の bahīrūpatayādhyasyamānaḥ は bahīrūpatayādhyasyamānaiḥ と複数具格に読み替えるのが適当であろうと思われる。

[Puṇ 1-2.9]

[Puṇ 1-2.9.1]

【ニヤーヤ説：語 (pada)・文 (vākya)】

一方、ニヤーヤ学派の者達等にとって、語 (pada) とは、各々先行する諸音素 (varṇa) の想起 (smṛti) を同行者 (saciva) とする最終の音素 (varṇa) である。[そして、その最終の音素は] 減しつつある状態 (naṣyadavasthā) として、経験 (anubhava) の対象となっている。【文 (vākya)】それとまったく同じように、文 (vākya) とは、それぞれ先行する語 (pada) の想起 (smṛti) を同行者 (saciva) とする最終の語 (pada) にほかならない。[そして、その最終の語 (pada) は]、減しつつある状態 (naṣyadavasthā) として、経験 (anubhava) の対象となっている。したがって、[この見解は] おおむね (prāyaśaḥ)、[語 (pada) の⑥] 集合 [が文であるとする] 説 (samghātapakṣa) にまさに含まれる。

[Puṇ 1-2.9.2]

【ニヤーヤ説：文意 (vākyārtha)】

同様に、[ニヤーヤ学派の見解では] 各々先行する語意 (padārtha) の想起 (smarana) を同伴者とする最終の語 (pada) によって生み出される理解 (pratīti) が文意 (vākyārtha) である。したがって、[彼らニヤーヤ学派の説は] 一般に、[文意は] 繋がり [であるとする] 説 (saṃsargapakṣa) にまさに含まれる。従って、それ (ニヤーヤ説) の不包括 (asamgraha) に基づいて、過小適用 (avyāpti) が、これ (ニヤーヤ説) に関して、いわれてはならない。

[Puṇ 1-2.10]

【関係 (saṃbandha) の考察】

【②の場合の saṃbandha】ところで、それ [ら上述の文及び文意定義] のなかで、文 (vākya) が、まさに無部分 (anavayava) 単一 (eka) であり、スポータ (sphoṭa) を特徴とする場合 [つまり文不分割に属す②の場合]、そして、文意 (vākyārtha) が直観 (pratibhā) を特徴とする場合、文 (vākya) と文意 (vākyārtha) の間には仮構 (adhyāsa) という関係 (saṃbandha) がある。[すなわち] 次のようにいわれるであろう。

『[VP 2.262] 文の形態は、文意を表示する (vākyavṛttasya vākyārthe vṛttih)』⁹⁾

【②以外の場合の saṃbandha】

[②以外の] 残りの諸見解の中で、ミーマーンサカの見解によれば、言葉 (śabda) と意味 (artha) の間の関係 (saṃbandha) は、〈表示されるもの〉 (vācya) と 〈表示するもの〉 (vācaka) を特徴とし、[それは] まさに適合性 (yogyatā) と呼ばれるものにほかならない。一方、唯識説を教義とする仏教徒達の説に従えば、語の意味 (śabdārtha) は知に関わる。その時、いかなる場合にも、[言葉と意味の間の関係は] 因果関係 (kāryakāraṇabhāva) にほかならない。一方、それ (関係) は、言語契

約 (saṃketa) を特徴とする、と知られるべきである。

そして、ニャーヤ学派の者達に従えば、それ [関係] は契約 (saṃketa) を特徴とするものにほかならない、というように、そこ (ニャーヤの見解) での文と意味と関係の本質が、手短に (saṃkṣepatas) 知られるべきである。[ここまでに述べた文 (vākya) と文意 (vākyārtha) に関する諸] 関係 (saṃbandha) の内の、まさに付託 (adhyāsa) [という関係] を [ここ Vākyakāṇḍa で] 示すであろう。一方、[Vākyapadīya 第三章] Padakāṇḍa において [は]、[関係の] 総てをあきらかにするであろう。

ここ [Vākyakāṇḍa] において、文法家 (vaiyākaraṇa) にとって、文 (vākya) は、決して分割されず (akhaṇḍa)、単一で (eka)、部分を持たない (anavayava) スポータを特徴とする (sphoṭalakṣaṇa) 言葉 (śabda) である。そして文意 (vākyārtha) は、直観 (pratibhā) にほかならない。そして、関係 (saṃbandha) は仮構 (adhyāsa) である。語論者 (padavādin) 達の見解の論破を目的とする [マハーバーシャ] ティーカーの作者 (パルトリハリ) は、以上のような最終結論 (para) を確立せしめている。[以上が] この章 [Vākyakāṇḍa] の要約である。

[解説] さて、以上、プンヤラージャの理解のみを提示した。しかし、kk. 1-2 については、プンヤラージャとはことなる解釈をする者がいる。ミーマーンサカやジャイナの文献において、これらの定義についての議論がなされている。これらについては、Raja [1962] が、そのテキスト上の問題を含めて、紹介している。

[Puṇ 3.0] さて、[先の kk.1-2 に対する注釈中であげた] ヴァールツァイカの作者とミーマーンサカの両者が述べる [〈vākya〉 定義] は、適用対象を同じくするのか、それとも異にしているのか、ということを考察するために、[パルトリハリは次の k.3 を] 述べる。

[解説] バルトリハリは、ここで、P 2.1.1 に対する二つのヴァールツティカという <vākya> 定義とジャイミニーストラの <vākya> 定義を比較する。これらは、ブンヤラージャが、kk.1-2 に対する注釈中で、八つの <vākya> 定義に加えて、具体的に掲げるものである。そこで、ブンヤラージャは、ヴァールツティカの定義に対して「学術的な」(paribhāṣika)、そして、ミーマーンサカの定義に対しては「世間的な」(laukika) という地位を与えていた。¹⁰⁾

[k.3] nighātādivyavasthārthaṃ śāstre yat paribhāṣitam /
sākāṅkṣāvayavam tena na sarvaṃ tulyalakṣaṇam // 3 //

[k.3] <nighāta> [udatta の脱落=anudattasvara] 等の確立のために、[文法学という]学術 (śāstra) において、[文定義がカーツヤーヤナによって]学術的に教えられている (paribhāṣita)。そ [の定義によって定義される <vākya>] と [ミーマーンサカがいう、相互に] 期待を伴った諸部分をもつ (sākāṅkṣāvayavam) [<vākya>] は、常に特質を同じくするわけではない。

[Puṇ 3.1] ここ [文法学という学術] では、[諸] <pada> に関する規定 (padavidhi) は、[P 2.1.1 samarthaḥ padavidhiḥ // によって] <sāmarthya> がある場合に、[paribhāṣā として] 述べられている (paribhāṣita) [専門的な観点から述べられている]。それ [ら padavidhi] のなかで (tatra)、複数の <pada> の間に[相互期待としての] <sāmarthya> があっても、<nighāta> 等は、ある場合には、認められない。例えば、

- (1) {ayaṃ daṇḍo harāṇena} ([ここに] 棒がある。おまえはそれとれ)
- (2) {odanaṃ paca mama bhaviṣyati} (おまえは飯を炊け。[それは])

私のものとなるであろう)

- (3) {odanaṃ paca tava bhaviṣyati} (おまえは飯を炊け。[それは] お前のものとなるであろう)

この [(1)の] 場合、「それによって」(anena) という代名詞 (sarv-anāman) によって棒 (daānāda) が指示されているから (parāmarśāt)、√hr̥ [の意味] と棒 (daṇḍa) には、[相互期待としての] <sāmarthya> がある。同様に、[(3)の場合] yuṣmad の意味の、odana との関係 (saṃbandha) に基づいて、√pac の意味と、それ (odana) には [相互期待としての] <sāmarthya> がある。

[Puṅ 3.2] そしてそのように [相互期待としての] <sāmarthya> があるならば、[padavidhi である] P 8.1.28 tiñ atīṇaḥ // に基づき、<nighāta> (アクセントの脱落 = anudatta) が結果する。また、P 8.1.22 te-mayāv ekavacanasya // に基づき [mama と tava にそれぞれ me と te という代置要素が] 代置される [こととなる]。しかし、[それらは] 望ましくない。というのは、[{ayaṃ daṇḍaḥ} と {harānena}、{odanaṃ paca} と {mama bhaviṣyat}、{odanaṃ paca} と {tava bhaviṣyati} は、それぞれ] 別個の文であるから (vākyabhedāt)。

[Puṅ 3.3] [しかし、一方で] <sāmarthya> がない場合にも、[<nighāta> や 'te' や 'me' の代置が] 望まれる [ことがある]。例えば、

- 4) 「河の岸に彼は立っている。{nadyās tiṣṭhati kūle}」
 5) 「わたしはあなたに米粒からなる飯を与える。{śalīnāṃ te odanaṃ dāsyāmi}」

この [(4) の] 場合、nadyāḥ と tiṣṭhati には、関係 (saṃbandha) は妥

当しない。したがって、sāmarthya は存在しない。しかし、[P 8.1.24 に基づく] <nighāta> が認められる。

同様に、「5」の場合] śāli と yuṣmad には、<sāmarthya> はない。しかし、P 8.1.22 に基づく yuṣmad に対する [te の] 代置が認められる。

[以上のように] 考慮して (ālocya)、ヴァーティカの作者は、ニガータ等の確立のために、[samarthaparibhāṣā をこれらに適用しないで] [次のように] のべている。

『同一の文において、ニガータ及び yuṣmad に対する代置が述べられるべきである』(vt 11 on P 2.1.1 samānavākye nighātayūṣmadādeśā vaktavyā)

[解説] ここでブンヤラージャが論じるのは、ブンヤラージャが引用する P 2.1.1 に対する vt. 11 をカーティヤーヤナが提示するしなげばならなかった理由である。ここで、カーティヤーヤナが扱うのは、P 2.1.1 における 'samartha' 解釈であり、またその P 2.1.1 が <nighāta> 等の適用の際に考慮されるべきか否かということである。P 2.1.1 samarthaḥ padavidhiḥ は「<pada> に関する文法操作は意味的に結び付いているものにかかわる」ということを述べている。そして <sāmarthya> に関する二つの解釈が同規則に対する vt で述べられている。一つは統合形の場合に見られる意味統合 <ekārthibhāva> であり、いま一つは <vākya> の場合に見られる相互期待 <parasparavyapekṣā> である。ところで、ここで問題となる <nighāta> を規定する規則は P 8.1.128 tin̄n̄ atīnaḥ である。この規則は、定動詞形でないもの (atīn̄) に後続する定動詞形 (tin̄=tin̄anta) の udātta アクセントの脱落 (<nighāta>) を規定している。また、同規則は P 8.1.16 padasya, P 8.1.17 padāt の支配下にあることにより、<pada> に関する文法操作を規定している (padavidhi)。先に見た <sāmarthya> の二解釈の内の前者、つまり、<sāmarthya> を意味統合 (ekārthibhāva) 理解するならば、{ayaṃ daṇḍo harānena}

などの統合形でない表現の場合には、P 2.1.1 は関与しないことになる。したがって、P 8.1.28 は、P 2.1.1 の関与は受けないことになる。したがって、定動詞形でない (atīnanta) でない ‘daṇḍah’ に後続する ‘hara’ には P 8.1.28 によって無条件に、〈nighāta〉がおこることとなる。同じように {odanaṃ pacatava bhaviṣyati} の場合には ‘tava’ に対して、同じく padavidhi である P 8.1.22 temayāv ekavacanasya によって ‘te’ が代置されることとなる。この、P 8.1.22 は yuṣmad あるいは asmad の単数 Datdive あるいは Genitive にそれぞれ ‘te’、‘me’ が代置されることを述べている。一方、〈sāmarthya〉を相互期待 (vyapekṣā) と理解するならば、P 2.1.1 が上記の場合に関与することとなる。したがって、P 8.1.28 や P 8.1.22 の規則は、〈pada〉間に 〈sāmarthya〉、つまりここでは相互期待であるが、がある場合にのみ適用されることとなる。しかし、それでも、P 8.1.28 の ‘hara’ に対する望ましくない適用は避けられない。なぜなら、{ayaṃ daṇḍo harānena} の場合、棒 (daṇḍa) と取るという行為 (haraṇa) の間には、代名詞 ‘anena’ を解して、相互期待があるからである。従って、この場合も P 8.1.28 の適用により ‘daṇḍah’ に後続する ‘hara’ には 〈nighāta〉がおこることになってしまう。このように、どちらの解釈をとっても、〈nighāta〉や yuṣmad admad に対する代置に関して、望ましい結果は得られない。

また、4) {nadyās tiṣṭhati kṛle} と 5) {śālināṃ te odanaṃ dāsyāmi} の場合にも問題がある。4) と 5) は 〈sāmarthya〉がないにもかかわらず、〈nighāta〉や yuṣmad, asmad に対する te, me の代置が起こることが必要な場合の例である。まず、4) {nadyās tiṣṭhati kṛle} の場合、‘nadyāḥ’ と ‘tiṣṭhati’ の間には関係 (saṃbandha) はない。岸 (kṛla) は、立つという動作の 〈adhikaraṇa〉であり、そこには 〈sāmarthya〉がある。しかし、‘nadyāḥ’ は ‘kṛle’ と結び付いているから、岸と立つという行為の間には 〈sāmarthya〉はない。したがって、P 2.1.1 の関与がある限り、これらの場合には、P 8.1.28 tiñn atīnaḥ // 等の規則は適用されない。しかし、先の 1) 2) 3) の場合とは逆に、これら 4) 5) の例では 〈nighāta〉が ‘tiṣṭhati’ に

はおこることが必要である。5) {śālinām te odanaṃ dāsyaṃ} の場合、śālinām と yuṣmad の間に <sāmarthya> はないのであるが、しかし、ここに挙げた例におけるのと同じように P 8.1.22 に基づく yuṣmad に対する te の代置が望まれる。そこで、カーティヤーヤナは、vt 11 において、samānavākya という新たな条件を提案するのである。

[Puṇ 3.4]

そしてそのような場合、{ayaṃ daṇḍo [harānena]} というこの表現において、[‘daṇḍaḥ’ と ‘hara’ という二つの <pada> 間に] <sāmarthya> があるとしても、[‘hara’ に関する] <nighāta> の結果可能性 (prasāṅga) はない。というのは、[‘daṇḍaḥ’ という] 起点 (avadhi) と [‘hara’ という] 起点に限定されるもの (avadhimat) は、ことなった <vākya> に属するものとして存在しているからである。なぜなら、‘asti’ を補うこと (adhyāhāra) によって、{ayaṃ daṇḍaḥ [asti]} は一つの <vākya> であり、そして、{hara anena} は二つ目の <vākya> であるから。しかしながら、{nadyās tiṣṭhati} 云々において、起点 (avadhi) と起点に限定されるもの (avadhimat) である二つの <pada> [つまり、‘nadyāḥ’ と ‘tiṣṭhati’] の間に <sāmarthya> がなくても、単一の <vākya> として確立されている場合、[‘tiṣṭhati’ に関して] <nighāta> 等はまさにおこる。したがって、それら [<nighāta> などが起るか起らないか] の無区別 (avyavasthā) はない。

[解説] ここで、プンヤラージャは vt 11 に依拠することによって、samarthaparibhāṣā に依拠した場合に起こりうる <nighāta> に関する規則などの望ましくない適用を避けうることを述べている。問題となる <pada> 間の <sāmarthya> の有無にかかわらず、一つの <vākya> 中であれば、P 8.1.28 等は適用可能であるし、一方、一つの <vākya> 中に問題となる <pada> がなければ、これらの規則は適用されない。しかし、‘samānavākya’ という条件を付す以上、そこでの ‘vākya’ とは何か、ということが明らかにされなければなら

ないのは、いうまでもない。そして、それを明らかにしているのが、P 2.1.1 に対する vt 11 に先行する vt 9 及び vt 10 という定義である。このことを次にブンヤラージャは説明する。

[Puṇ 3.5]

「同じ文において (samānavākya), <nighāta> 等が述べられるべきである (vt 11 on P 2.1.1)」、と[ヴァールティカの作者によって]いわれている。こ[の Vārttika]において (tatra)、<vākya> [とは何か] が知られているときに、<vākya> が同じであること (samānavākyatva) は知られる。[<vākya> が何であるかが不確定であれば、それが samāna であるとかないとかいうことはできないのは明白である。] 従って、ヴァールティカの作者によって、[これに関連して] [次のような] 文定義が述べられている。

「<avyaya> <kāra> <kāravaiśeṣaṇa> <kriyavaiśeṣaṇa> を伴う定動詞形が <vākya> である。」¹¹⁾

(vt 9 on P 2.1.1 ākhyātaṃ sāvyayakāravaiśeṣaṇaṃ vākyam)

「単一の tiñanta を含むもの [が <vākya> である。]

(vt 10 on P 2.1.1 ekatiñ)

[解説] ここで挙げられた定義に基づいて、ブンヤラージャの難点回避は可能になる。{ayaṃ daṇḍo harānena} に対して、{ayaṃ daṇḍo [asti] harānena} というように、‘asti’ を補うこと (adhyahāra) によって、{ayaṃ daṇḍaḥ [asti]} と {harānena} を別個の <vākya> としてあつかうことにより、この {ayaṃ daṇḍo harānena} という表現中の ‘daṇḍaḥ’ と ‘hara’ が、vt. 11 において述べられた「同一 <vākya> 中」という条件を満たさなくなる。したがって、P 8.1.28 による ‘hara’ に対する <nighāta> 結果などという誤りは回避される。また、{nadyās tiṣṭhati kūle} の場合、そこに含まれる定動詞形 (tiñanta) は、一個である。したがって、一つの <vākya> 中で、定動詞形でな

い ‘nadyāh’ に定動詞形である ‘tiṣṭhati’ が後続していることとなる。これは当然 P 8.1.28 の適用条件を満たすので、‘tiṣṭhati’ には、望ましい 〈nighāta〉 が起こることとなる。

[Puṇ 3.6]

そのような場合、ミーマーンサカが述べる [文定義] と、この [ヴァールティカの作者の文定義] は、どんな時にも包括 (共存) samaveśa があるのか、ないのか、ということが考慮される。[文法学という] 学術において、ヴァールティカの作者 (vākyakṛt) によって、〈nighāta〉 等の区別を目的とする (nighātādivyavasthārtha) 文定義が専門的な観点から述べられている (paribhāṣita)。その文定義は、ミーマーンサカが述べる文定義と全く同じ [というわけ] ではない。[k.3 中の] ([k.3 中の] [相互に] 期待を伴った諸部分のある) (sākāṅkṣāvayavam) [というこの表現] によって、ミーマーンサカが述べる文定義が示唆 (sūcita) されている。

【samaveśa】 その場合、ある場合には、それらが、共存している (samāviśataḥ)。

例えば、

4) {nadyās tiṣṭhati kūle} (彼は川岸に立っている。)

5) {śālīnām te odanaṃ dāsyāmi} (あなたに米粒の飯を私は考える)

【asamaveśa】 [しかし]

1) {ayaṃ daṇḍo harānena} ([ここに] 棒がある。これでとれ。)

2) {odanaṃ paca tava bhaviṣyati} (飯を炊け。[それは] あなたのものとなるであろう)

等の場合においては等しく適用されない (asamaveśa)。[したがって] ミー

マーンサカの文の定義に依拠するならば、[‘hara’ に関する] 〈nighāta〉等が結果する [という望ましくない] こととなる。というのは、[それらは] 〈目的〉が一つであるから (ekaprayojanatvāt)。しかし、[それらは] 望ましくない。それゆえ、ヴァールティッカの作者が述べるところにほかならない文の定義がより優れている (jyāyas)。

[解説] ここで、samāveśe / asamāveśa の区別は、結局 P 8.1.28 等の規則が望ましい場合には適用され、望ましくない場合には適用されない、という観点からなされている。4) {nadyās tiṣṭhati kūle} や 5) {śalīnām te odanaṃ dāsyāmi} の場合には、カーティヤーヤナの定義によらずとも、〈nighāta〉や ‘te’ ‘me’ の代置という文法操作に関して問題はない。しかし、1) {ayaṃ daṇḍo harānena} や 2) {odanaṃ paca tava bhaviṣyati} の場合には、ミーマーンサカの定義にはなく、カーティヤーヤナが述べる 〈vākya〉 定義に従わなければ、望ましくない文法操作が行われることになってしまう。したがって、ブンヤラージャは、カーティヤーヤナの定義を学術的な定義といい、さらに、ミーマーンサカの定義よりも「優れている」と述べるのである。ただし、カーティヤーヤナの二つの定義の適用領域に関して、後にナーゲーシャが為したような、その適用領域の区別は、ブンヤラージャはなしえていない。¹²⁾

〈Tikā on VPII k.3 シノプシス〉

3.0 導入

k.3 vt 9 & vt 10 と JS 2.1.46 の相違

3.1 vt 11 samānavākya... 提示必要性

3.2 <sāmārthya〉がある場合の P8.1.28 等適用非適用の問題点指摘

3.3 <sāmārthya〉がない場合の P8.1.28 等適用非適用の問題点指摘

3.4 問題点回避策

3.5 vt 9 及び vt 10 提示

3.6 vt による定義の優位性提示

[追加参考文献及び略号]

JS: Jaiminisūtra (Ānandāśrama ed.)

TV: Tantravārttika (Ānandāśrama ed.)

Raja, Kunjuni [1962]: “Bhartṛhari’s List of Sentence-Definitions, A Textual Problem, *Adyar Library Bulletin*, 47:206-210.

黒田泰司 [1981]: 「Kumārila の bhāvanā 説について(1)」『印度学仏教学研究』28-1. 458-456.

黒田泰司 [1982]: 「Kumārila の bhāvanā 説について(2)」『印度学仏教学研究』29-1. 441-436.

〈注〉

- 1) VP II, k.143 vicchedagrahaṇe ’rthānām pratibhānyaiva jāyate / vākyārtha iti tām āhuḥ padārthair upapādītām //
- 2) VP II, k. 414 (WR418) kriyā kriyāntarād bhinnā niyatādhārasādhana / prakrāntā pratipatṅnām bhedāḥ sambodhahetavaḥ //
- 3) pratibhā yatprabhūtārthā yām anuṣṭhānam āsītām / phalaṁ prasūyeta yataḥ sā kriyā vākyagocarash //

なお、残念ながら、ペンヤラージャの引用するこの偈の出典は明らかに出来なかった。

- 4) VP II, k.42 saṁbandhe sati yat tv anyad ādhikyam upajāyate / vākyārtham etaṁ samprāhur anekapadasaṁśrayam //
- 5) [VP II, k.18 teṣām tu kṛtsno vākyārthaḥ pratibhedam samāpyate / vyaktopyaṅjanā siddhir arthasya pratipatṅṣu //
- 6) VP II, k.411 (WR415) pūrvair arthair anugato yathārthātmā paraḥ paraḥ / saṁsarga eva prakrāntas tathānyeṣv arthavastuṣu (*) // * R, A, I: tathānyeṣv arthavastuṣu. 但し、k.411 (R, p.469) それ自体は、I, R 共に tathānyeṣv arthavastuṣu.
- 7) VP II, k.113 abhidheyāḥ padasyārtho vākyasyārthashḥ prayojanam / yasya tasya na saṁbandho vākyānām upapadyate //
- 8) VP III, kriyāsamuddeśa, k.1 を参照せよ。
- 9) VP II, k.262 arthasvarūpe śabdānām svarūpād vṛttim icchataḥ (*) / vākyarūpasya (**) vākyārthe vṛttir anyānapekṣayā // * Iyer’s ed. vṛttir iṣyate, ** Puṅ on VP 2.1-2 に引用される当該偈頌においては、“vākyavṛttasya vākyārthe

vṛttiḥ” となっている。

- 10) 本研究第一編に示したシノブシス [1-2.3] 参照。

Pradīpa on P 8.1.18: samānavākya iti 'arthaikatvād ekaṃ vākyaṃ sākāṅkṣaṃ ced vibhāge syād' iti laukikaṃ vākyalakṣaṇam / iha tu vākyaṃ paribhāṣitam —ākhyātaṃ sāvyaya-kāra-kavīṣeṣaṇam vāyam' iti /

- 11) MBh on P 2.1.1: ākhyātaṃ sāvyayaṃ sakāra-kam sakāra-kavīṣeṣaṇam vāyasam-jñaṃ bhavatīti vaktavyam ... / sakriyāvīṣeṣaṇam ceti vaktavyam / / aparāha / ākyātaṃ saviṣeṣaṇam ity eva / sarvāni hy etāni kriyāvīṣeṣaṇāni / Pradīpa thereon: sakriyāvīṣeṣaṇam ceti / pratyāsattya kārakasyaiva yadvīṣeṣaṇam tad gṛhyate, na tu kriyā iti bhāvaḥ / ākhyātena ca kriyāpradhānatvaṃ lakṣyate ity atinanteṣv api devadattena śayitavyam ityādiṣu vākyaiva sidhyati /

Uddyota there on: saviṣeṣaṇam ity eva kriyāvīṣeṣaṇe 'pi sidhyatīty ata āha pratyāsattyeti / yady api kāra-katvād apy asya siddhyati tathāpy avyayagrahaṇavad idam api prapañcārtham iti tattvam iti bodhyam /

- 12) なお、こちらの定義の解釈の相違の詳細については、近刊の拙稿「Vākyapadīya (VP) 第2章 kk.3-4」『印度学仏教学研究』第58巻、及び Joshi [1968] の当該箇所を参照せよ。

A STUDY OF THE VĀKYAPADIYA II (2)

Yoshichika HONDA

SYNOPSIS (2)

1-2.5 *vākyārtha*1-2.5.1 ①②③ (*akhaṇḍapakṣa*) → *pratibha*1-2.5.2 ④ *ākhyātaśabda* → *kriyā*1-2.5.3 ⑤ *krama* ⑥ *saṃghāta* → *saṃsarga*1-2.5.4 Another interpretation of *vākyārtha* in the definition ⑥1-2.5.5 ⑦ *ādyaṃ paḍam* ⑧ *pr̥thak sarvaṃ paḍam sākāṅkṣam*1-2.5.6 Another interpretation of the word '*artha*' (artha=prayojana)

1-2.5.7 The conclusion

1-2.6 *abhihitānvaya* / *anvitābhidhāna*1-2.7 The reason why *vākyārtha* is not explained in the case of *vidhi*, *niyoga* and *bhāvanā*1-2.8 Puṅyarāja's interpretation of *vākya* theory in Buddhism.1-2-9 Puṅyarāja's interpretation of *vākya* theory in Nyāya school.1-2.10 *saṃbandha* between word and its meaning.3. Bārṭhari points out difference between vts. 9-10 on P 2.1.1 *ākhyātaṃ sāvayakārakaviśeṣaṇaṃ vākyaṃ, ekatīn* and JS 2.1.46 *arthaikatvāt ekam vākyaṃ sākāṅkṣam ced vibhāge syāt*.

(To be continued)